

『無量寿経』の漢訳者について

香 川 孝 雄

一、問題の所在

大藏経では『無量寿経』の訳者は康僧鎧であると伝えてゐる。この説は『開元録』⁽¹⁾によつたもので、さらに遡れば『歴代三寶紀』⁽²⁾に由来してゐる。しかるに道安、僧祐、法経、彦惊、静泰などの経録には康僧鎧訳について何ら触れるところがない。そのみならず、天台智顗の撰と伝えられる『観無量寿仏経疏』⁽³⁾や瓊興の『無量寿経連義述文贊』⁽⁴⁾卷上は竺法護の訳としてゐる。これらのことから、今世紀に入つて康僧鎧訳に疑問が持たれるようになり、多くの学者によつて研究がなされてきたが、未だ決定的な結論が出ていないように思われる。このことは一に経録の混乱によるもので『無量寿経』に関する経録の記述を整理して見ると次頁の表のごとくである。

この表は所謂五存七欠全部をあげたのではなく、本論文の主題に関係あるもののみである。また表中(○)とあるのは帛延と記してゐるもので白延と区別した。この表を見ると経録の伝承がいかに混乱してゐるかということがわかる。

この表中、安世高訳、曇摩蜜多訳は元来、存在しなかつたものと考えられる。白延の『無量清浄平等覚経』は現在

支婁迦識と伝えられるもので、『無量寿経』とは別である。したがって今問題となるのは、康僧鎧、竺法護、仏陀跋陀羅、宝雲の四人に絞られることになる。

新無量寿経	新無量寿経	新無量寿経	浄亦云等覺量經	無量寿經	無量清淨平等覺經	無量寿經	無量寿經	經典名訳者名
曇摩蜜多	宝雲	仏陀跋陀羅	竺法護	(帛延)	康僧鎧	安世高		録名
			○					道安録 374年頃
	○	○	○					出三蔵記集 502~515年頃
○	○	○	○	○				法經録 594年
	○	○	○	○	○	○		歴代三寶記 597年
			○	(○)				仁寿録 602年
	○	○	○	(○)○	○	○		大唐内典録 664年
			○	○				静泰録 666年
	○	○	○	○	○	○		古今訳経図紀 ~640年~
○	○	○	○	(○)	○	○		武周録 695年
○	○	○	○	○	○	○		開元録 730年
○	○	○	○	○	○	○		貞元録 800年

二、康僧鑑說

康僧鑑訳を最初に出す現存の文献は『歷代三宝紀』である。まずその説の起くる所以から考察したい。『歷代三宝紀』卷五にはつぎのように記している。

無量壽經二卷 第二訳。見竺道祖晋世雜錄及宝唱錄与世高出者小異

右二部合四卷。天竺国沙門康僧鑑齊王世嘉平年於洛陽白馬寺訳

この記述によると康僧鑑訳の説は竺道祖の『晋世雜錄』や『宝唱錄』によったものである。この『晋世雜錄』なるものがどういふ書物であつたのか、現存しないためにわからないが『歷代三宝紀』卷七に

魏世錄一卷 吳世錄目一卷

晋世雜錄一卷 河西錄目一卷

右四錄経目合四卷。廬山東林寺釈慧遠弟子沙門釈道流創撰。未就而流病卒。同学竺道祖。因而成之。大行於世。

とある。すなわち廬山の慧遠の弟子であつた釈道流がはじめ経録を撰述していたが、完成を見ずに病のために亡くなつた。そこで同学の竺道祖がその志を継いで撰述して完成した四部の経録の一つが『晋世雜錄』であるという。梁の『高僧伝』卷六によると、道流は二十八歳で歿し、竺道祖は晋の元熙元年（四一九年）七十三歳で歿しているから、同年輩であるとするならば、道流の死は三七四年であり、その後、間もなく道祖によつて目録が完成したものと考えられるから道安の目録（三七四年撰述）とはほぼ同時代のものである。しかし費長房は『歷代三宝紀』卷十五の卷末に竺道祖など二十四家の經典目録をあげ

右二十四家録檢ニ伝記ニ有目。並未嘗見ニ故列之於後。使伝ニ万世。

と告白するごとく、彼は實際に見ていないものを、いかにも見たごとく書いていたのであって、費長房の言は信用し難いと云う外はない。

また、『晋世雜錄』と並べて記している『宝唱録』は『歷代三寶紀』卷三⁽¹⁰⁾によると天監十七年(五一八年)に撰述された四卷本であったという。宝唱は『統高僧伝』卷一⁽¹¹⁾によると僧祐の弟子で、はじめ帝(梁の武帝)は天監十四年に安樂寺の僧紹に勅して『華林仏殿經目』を撰述せしめたが、帝旨にかなわず、宝唱に勅して重ねて經録を編纂せしめた。宝唱は前の録をさらに改訂して完成したのが『宝唱録』であるという。この『宝唱録』も現在は散佚しているが、費長房は『歷代三寶紀』卷十五⁽¹²⁾に、その項目まで記載しているから、彼の時代には存在し、また實際に見たことは事実であろう。しかし、その内容については甚だ信じ難い。たとえば『出三藏記集』卷二に記載の『道安録』に編入されていた經典と較べると、道安が採らなかつた『四十二章經』を費長房は『宝唱録』によって竺法蘭の訳とし、道安が竺法護訳とした『修行道地經』を安世高訳とし、また道安が失訳とした『禪行三十七品經』も安世高訳として⁽¹³⁾いる。また僧祐が失訳とした『不莊技女經』を費長房は支謙訳とし、同じく僧祐が失訳と判定した『十二遊經』を費長房は『宝唱録』によって疆梁婁至の訳として⁽¹⁴⁾いる。『宝唱録』そのものは現存しないから、その資料的価値を云々することは困難であるが、以上の検討からしても、かなり不確かな目録であるといえよう。

したがって先の『晋世雜錄』はその価値を検討するまでもなく、費長房が實際に見ていない目録であるから問題外であり、いまの『宝唱録』は信ずるに足らない目録であるとする、それらによつた費長房の言は信ずるに値しないものであり、康僧鎧の説は随分あやしい説となつてくる。とくに宝唱の師である僧祐の『出三藏記集』には康僧鎧の名すら出てこないところから康僧鎧は康僧会と同一人物ではないかという説⁽²²⁾すら出るほどで、康僧鎧説の疑いは深

まるばかりである。

それでは康僧鎰なる人物は、どのような人であるのか。詳しい伝記は伝わらないが梁の『高僧伝』卷一⁽²³⁾には、つぎのように記している。

有^レ外国沙門康僧鎰者。亦以^二嘉平之末^一。来^三至洛陽^一。訳^二出郁伽長者経等四部経^一。

嘉平の末は西紀二五三年に当るから、かなり早い時期の人で『郁伽長者経』など四部の経を訳したとあるのみで、残り三部の経が何であるかは明らかでない。しかし費長房は『歴代三寶紀』卷五⁽²⁴⁾に『郁伽長者経』と『無量寿経』を訳したと述べている。ところで最近の研究では訳文から見て『郁伽長者経』は二世紀頃の訳ではなくて劉宋(四二〇—四七九年)以後の訳であるとされている。このことも、『無量寿経』の康僧鎰訳説を疑う一つの理由であり、後述するが『無量寿経』の訳語も、そんなに古い訳ではないと思われる。

康僧鎰説を支持する近代の学者に加藤智学氏⁽²⁵⁾があるが、この説は明治四十年に発表された相当古い説であり、その根拠は康僧鎰訳とされる『郁伽長者所問経』と『無量寿経』の訳文を比較すると、その訳文が頗る似ていることが理由にあげられているが、前述のごとく『郁伽長者所問経』が康僧鎰訳でないとなると、この説は崩れてしまうのである。また椎尾弁匡博士は、⁽²⁷⁾康僧鎰本に基づいて竺法護が斧鉞を加え、曇摩蜜多、仏陀跋陀羅が更新し、宝雲によって大成された、と述べられ、経録に名の出たすべてを『無量寿経』の訳者に関係づけて、経録の説を正当化しようとしたがその根拠は明らかでない。

以上の諸点より、今日では康僧鎰説を否定することが定説のようになってゐる。

二、竺法護説

康僧鎧でないとするならば、それでは誰が訳したのであろうか。今日有力な説は、竺法護説と仏陀跋陀羅・宝雲共訳説の二説に絞られる。そこでまず竺法護説の検討から始めよう。

1 経録からの検討

『無量寿経』が竺法護によって訳されたとする説は『出三蔵記集』卷二の竺法護の項に⁽²⁸⁾

無量寿経二卷一名無量清淨平等覚経

とあるのが初出で、ここのは道安の説を引いたところである。その他、竺法護説をとる経録を調べると『法経録』卷一には⁽²⁹⁾

晋元嘉年、竺法護訳

とする。右の年号について高麗版には元嘉とあるが宋元明三本では永嘉となっていて異なる。他の経録は永嘉とあるから、宋元明三本の方が正しいであろう。『歴代三寶紀』卷六では竺法護の条に

無量寿経二卷永嘉二年正月二十一日訳。⁽³⁰⁾是第四出。与吳世支謙魏世康僧鎧白延等出本同文異亦云無量清淨平等覚経。見竺道祖晋世雜録。

と記され、『仁寿録』卷二、⁽³¹⁾『静泰録』卷二、⁽³²⁾『内典録』卷二、⁽³³⁾『古今訳経図紀』卷二、⁽³⁴⁾『武周録』卷三、⁽³⁵⁾『開元録』卷二、⁽³⁶⁾など、すべて『三寶紀』の説を継承している。ただし『武周録』卷十二と『開元録』卷十四は、竺法護訳を欠本録に編入せしめているところに問題がある。

しかしこの竺法護説は一部に信じられていたらしく、前述の天台智顗の撰と称する『観無量寿仏経疏』や環興の『無量寿経連義述文賛』はこの説をとっている。近代になってからも、竺法護説に賛同、もしくはその可能性を認め

る学者に荻原雲来⁽³⁹⁾、泉芳環⁽⁴⁰⁾、野上俊静⁽⁴¹⁾、滋野井恬⁽⁴²⁾、後藤義乗⁽⁴³⁾、稻城選恵⁽⁴⁴⁾などの諸氏がある。

経録の上から云えば、一番信用を置ける道安や僧祐もこの説を採っているので信憑性があるように思われるが、『出三藏記集』に「亦云無量清浄平等覚経」とあるのがひつかかる。この註記について問題とされたのは大野法道博士⁽⁴⁵⁾で、博士は『無量清浄平等覚経』の竺法護訳を否定して帛延の訳とされるのであるが、その所論の中で、「この註は僧祐の添加であると俱に、道安が何によって無量寿経の名を出したかが問題である。これによって道安は平等覚経を見なかったことが想定される。何となれば若し彼がこの経を見て竺法護訳と認めたとすれば、经文に全くない無量寿の経名を正面に出す筈はないからである」と述べられる。しかし筆者は逆の考えで、道安が『無量清浄平等覚経』竺法護訳と記していたのを、僧祐が後に訳された『無量寿経』と内容が似ているために『無量寿経』と勝手に書きかえ、そして註に従来の『無量清浄平等覚経』の名を「亦云」として書き加えたものであると考えている。そして新たに訳された『無量寿経』を『新無量寿経』としたとすれば、この疑問は解消することになる。したがって筆者の結論は、『無量清浄平等覚経』の訳者が竺法護であり、『無量寿経』の訳者は竺法護ではないということになる。そのことは訳語・訳風の検討からも証することができる。

2 訳語・訳風からの検討

泉芳環氏は『無量寿経』は『平等覚経』より後の訳と見られることを大前提とし、氏は『平等覚経』を帛延の訳とするから『無量寿経』は帛延以後の訳者でなければならぬ。そこで竺法護訳の『正法華経』や『仏昇忉利天為母説法経』などと較べると類似した語句が認められること。さらに旧録の肯定などから「竺法護訳とするに傾かざるを得ない」とされている。ただし追記があつて境野黄洋博士の著書を繙いてこの結論を保留して後日の研鑽を期すとされている。

同じように他の竺法護訳出經典の訳語と『無量寿經』の訳語を比較した研究として滋野井恬氏がある。氏は竺法護訳の『普曜經』、『阿差末經』、『正法華經』とを較べ、同一もしくは酷似した訳語の多いことを指摘され、竺法護訳への一傍証とせられた。たしかに同一の語や酷似の用例が多いことは事実であるが、また違った訳語もあるので、そのことについては触れておられない。あくまで比較的であつて、これをもつて竺法護訳であるというきめ手にはならない。

最近、数理統計学を駆使して『無量寿經』の訳者を割り出そうとする試みがなされた。それは後藤義乗氏の研究で、その狙いはよいと思うが、コンピュータに入れる作業を余程慎重に考えてやらねば、正しい解答は得られないと思う。後藤氏は中国初期の訳經者十三人の訳した二十六の經典における彼、此・是・無・不・所・者・諸・於・也・応・甚・共・猶・由・与・爾・則・雖・非・言・曰・告・已・從・復・亦・令・之・如・白・能・今・故・作・如・是・我・吾・斯・唯・云・必の四十二の語と音写語の頻度を調査し、各訳者の特徴を見出してこれを無量寿經類にあてはめたところ『無量寿經』に関しては確率の高い方から支謙、竺法護、支謙、覺賢という順序が得られたという。そこで後藤氏は竺法護説を主張されるのである。筆者は数理統計学なるものを知らないが、名詞も調査の対象にすることができないものであろうか。藤田宏達氏は、如來の十号を例にあげて反論されているが、このようなものも調査の対象にする必要があるのだからうか。さらに注意すべきは、訳者として名の出ているのは訳主の名であつて、その人が実際に漢文に翻訳したかどうかは疑問である。多くの場合、訳主はインドや西域諸国から原典を持つて渡来した異邦人であり、短期間で言語構造を異にする漢文に通じたとは考えられない。必ず伝語とか筆受という任に當る協力者があつて、始めて漢文訳の經典が完成した。竺法護⁽⁴⁶⁾のように梵漢両語に通じていた人は別であるが、實際の漢訳者は誰であつたかということも考慮に入れねばならないであらう。

また翻訳者は終始同じ訳語を用いていたかと云えば、これも疑問である。竺法護は四十三年間という長い訳経生活を送った⁽⁴⁷⁾。その間土地を異にし、協力者も異にしている。たとえば Dīpaṅkara を『生経』⁽⁴⁸⁾卷四、『普曜経』⁽⁴⁹⁾卷一、卷三、⁽⁵⁰⁾卷六、卷七、『阿惟越致遮経』⁽⁵¹⁾卷下では「定光」と訳しているが、『阿闍王女阿術達菩薩経』⁽⁵²⁾、『太子刷護経』⁽⁵³⁾では、「提和竭羅」と音写している。このことは滋野井氏⁽⁵⁴⁾も竺法護訳の『光讚般若経』、『正法華経』、『須摩提菩薩経』の経序を比較して訳語の違いを指摘しておられる。また同一經典の中においても場所によって異なる訳をしている場合すらある。たとえば『平等覚経』において Dharmakara を「曇摩迦留」⁽⁵⁵⁾と音写したり「法宝蔵比丘」⁽⁵⁶⁾、「法宝蔵菩薩」⁽⁵⁷⁾と義訳するなど、極めて複雑である。

さらに『無量寿経』の場合、五悪段の訳語は前代からの翻訳をほとんどそのまま受け継いだようであるから、他の文と同様に扱うことは避けなければならない。これらのことを充分配慮しなければ、いくら最新の科学的方法を用いても、正しい結果は得られない。後藤氏の方法で割り出した結果、もっとも確率の高いのは支婁迦識訳であるという答えが出ていること自体が、どこかに不十分な点があったと云わざるを得ない。

稻城蓮恵氏は竺法護訳の説をとり、前期に『平等覚経』を訳し、後期に『無量寿経』を訳したという独特の説をたてられた。その理由として、竺法護は四十年の長きに亘って訳経を続けたのであるから、前期と後期とでは訳語にも変遷があったであろうということを前提とし、『平等覚経』と竺法護訳出經典を比較すると共通するものが多い。とくに「平等覚」なる語は、竺法護以外では姚秦の竺仏念と劉宋の求那跋陀羅に限られていて、竺法護訳の經典に最も多い。その他「般泥洹」なる語が用いられているが、これは古訳時代の訳語であるところから『平等覚経』の竺法護訳説を支持する。一方『無量寿経』と『正法華経』の訳語を較べると『正法華経』の方が古型をとどめている。羅什訳『阿弥陀経』は「極樂」なる新語を用いているが『無量寿経』は「安樂」「安養」の訳語を用いている。「安養」の

語は竺法護の『正法華經』『文殊師利仏土嚴淨經』にのみ見えるものであり、「安樂」は竺法護の『正法華經』『阿惟越致遮經』『海龍王經』『文殊師利仏土嚴淨經』にあり、その他、仏駄跋陀羅、曇無讖、鳩摩羅什、功德直、曇無竭、智吉祥、吉迦夜、菩提流支、那連提耶舍、達磨笈多、闍那崛多、真諦、義淨、唐の菩提流志、不空なども「安樂」と訳しているという。しかし「安樂」と「安養」の両方を出しているのは竺法護以外にはないから『無量寿經』も竺法護訳とし、『平等覺經』が古訳の型を保っているから前期、『無量寿經』を後期の訳と推定されるのである。竺法護以前では「極樂」の語を「須摩提」（支婁迦讖訳『般舟三昧經』三卷本・一卷本、失訳『拔陂菩薩經』）「須阿摩提」（支謙訳『慧印三昧經』）「須阿摩提阿弥陀仏刹土」（聶道真訳『三曼陀跋陀羅菩薩經』）「須摩提国」（竺法護訳『方等般泥洹經』）などと音訳されるのが常であり、「安樂」とか「安養」と義訳されるのは竺法護が最初であり、「安養」の語は竺法護訳以外にはあまり見られないが、那連提耶舍訳『月燈三昧經』に用例があるところから、それだけで竺法護訳と決定することは早計であろう。この説は竺法護が『平等覺經』と『無量寿經』を共に訳したというユニークな説であるが、『平等覺經』の方は筆者も賛成である。しかし『無量寿經』の方は訳語の上から考えて認めることはできない。

以上の諸説は、すべて『無量寿經』の訳語が、竺法護訳出經典の訳語と似ている部分だけを取りあげて、竺法護訳説を主張されたのであるが、逆に類似していない訳語もかなり見出せるのである。望月、北川、藤田の各氏は、この点を強調され、竺法護説を否定されるのである。いま『無量寿經』の訳語と竺法護訳出經典のそれとの違いを北川氏の対照表を土台として、若干筆者の見出したものを付け加えて記すとつぎのごとくである。

菩薩開士	世尊	衆祐	羅闍祇耆闍崛山	王舎國鷲山	王舎城耆闍崛山	無量壽經の訳語	竺法護訳	竺法護訳経典名
正法華經一、二、六、七、九、十、(大九、六四c、七三b、一〇六c、一二二a、一二二c)	正法華經一、二、六、七、九、十、(大九、六四c、七三b、一〇六c、一二二a、一二二c)	正法華經一、二、六、七、九、十、(大九、六四c、七三b、一〇六c、一二二a、一二二c)	正法華經一、二、六、七、九、十、(大九、六四c、七三b、一〇六c、一二二a、一二二c)	正法華經一、二、六、七、九、十、(大九、六四c、七三b、一〇六c、一二二a、一二二c)	正法華經一、二、六、七、九、十、(大九、六四c、七三b、一〇六c、一二二a、一二二c)	幻土仁賢經(大一二、三一a) 如幻三昧經上(大一二、一三四a) 月光童子經(大一一四、八一五a) 順權方便經上(大一一四、九二二c) 心明經(大一一四、九四二a) 海竜王經一(大一一五、一三一c) 文殊師利善超三昧經上(大一一五、四〇六b) 弘願広顯三昧經一(大一一五、四八八b)	幻土仁賢經(大一二、三一a) 如幻三昧經上(大一二、一三四a) 月光童子經(大一一四、八一五a) 順權方便經上(大一一四、九二二c) 心明經(大一一四、九四二a) 海竜王經一(大一一五、一三一c) 文殊師利善超三昧經上(大一一五、四〇六b) 弘願広顯三昧經一(大一一五、四八八b)	幻土仁賢經(大一二、三一a) 如幻三昧經上(大一二、一三四a) 月光童子經(大一一四、八一五a) 順權方便經上(大一一四、九二二c) 心明經(大一一四、九四二a) 海竜王經一(大一一五、一三一c) 文殊師利善超三昧經上(大一一五、四〇六b) 弘願広顯三昧經一(大一一五、四八八b)

善思議菩薩	劫寶那	羅迦葉	優樓頻	迦耶迦葉	那提迦葉	摩訶迦葉	阿那舍	菩提	緣覺	菩薩	善思議菩薩
正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)	正法華經一、五(大九、六三三a、九六c)

解脫菩薩 觀世音菩薩	解縛菩薩 光世音菩薩	尊者	賢者	了本際 六種震動	優曇羅華 鉢曇摩華 拘物頭華 分陀利華 兜率天
正法華經一(大九、六三 b)	正法華經一(大八、一四七 b)			知本際 六反震動	青蓮 黃蓮 白蓮 兜術天
光讚經一(大八、一四七 b)	正法華經一、十(大九、六三 a、一三八 c)	光讚經一、二(大八、一四七 a、二一〇 b)	正法華經一(大九、六三 a)		
濟諸方等覺經一(大九、三七七 c)	光讚經一、二(大八、一四七 a、二一〇 b)	正法華經一(大九、六三 a)	方等般泥洹經上(大一二、九二〇 b)		
光讚經一、二(大八、一四七 a、二一〇 b)	正法華經一(大九、六三 a)	月光童子經(大一一、八一五 c)	順權方便經上(大一一、九二三 a)		
正法華經一、五(大九、六三 a、九六 c)	光讚經一、六、九(大八、一四七 c、一八六 a、二一〇 a)	正法華經一、四、六、九(大九、六三 c、八九 c、一〇六 a、一二四 a)	阿惟越致遮經上、下(大九、二〇〇 a、二二四 b)		
正法華經八、十(大九、一二〇 a、一三〇 c)	正法華經八、十(大九、一二〇 a、一三〇 c)	正法華經八、十(大九、一二〇 a、一三〇 c)	正法華經八、十(大九、一二〇 a、一三〇 c)		
正法華經八、十(大九、一二〇 a、一三〇 c)	正法華經八、十(大九、一二〇 a、一三〇 c)	正法華經八、十(大九、一二〇 a、一三〇 c)	正法華經八、十(大九、一二〇 a、一三〇 c)		
生經三(大八、一六六 a)	太子慕魄經一(大八、四一〇 c)	修行本起經一(大八、二八三 b)			

歡喜踊躍善心	正焉	如來應供 明行足 正覺	逝世間 解無上 調御丈 天師尊	無生法忍	那由他
欣然踊躍善心	正焉	如來至真 明行正覺 善逝	世間解 上士道 法師祐	不起法忍	那術
光讚經二、十(大八、一四七 c、一五六 a、二一〇 b) 正法華經十(大九、一三三 b) 正法華經十(六九、一三一 c)	正法華經三(大九、八七 c) 正法華經十(……為世尊)(大九、一三二 c)	光讚經二(大八、一六二 a) 正法華經六、八、九(大九、九九 b、一一五 a、一二七 b) 阿惟越致遮經上、中(大九、二〇二 a、二一五 a、二一七 b) 正法華經一、三(大九、六七 b、八七 b) 阿惟越致遮經上(大九、一九九 a)			

右の対照表によって『無量寿経』の訳語が竺法護の訳語と一致しないことが知られるであろう。そのみならず僧祐が『出三藏記集』巻一の「前後出経異記」に新旧両経の用語例を比較してあげているが、『無量寿経』に用いられた用語とそれらとを比べて見ると左下の表のようになる。

これをもつてしても『無量寿経』の用語が新経（羅什以後）の訳語を用いており、竺法護の訳とは認められないことが明瞭である。

3 流传からの検討

しかし、ここに有力な竺法護説を裏付ける資料が登場した。それは大谷大学禿庵文庫所蔵の大魏神瑞二年（四一五年）の跋文を有する『無量寿経』の敦煌写経である。この資料を使って従来、最も有力視されていた宝雲説（劉宋永初二年＝四二一年）を否定して竺法護説を主張されたのは野上俊静博士である。その写経の跋文にある神瑞二年は西紀四一五年に相当するから、宝雲の訳した年、西紀四二一年より古いことになり、そうすると『無量寿経』の宝雲訳はあり得ないということになる。それでは誰が訳したかと云えば、神瑞二年以前では竺法護以外にはあり得ないというのが野上博士の説である。それを傍証する資料として支遁（三一四—三六六年）の『阿弥陀

旧 経		新 経		無量寿経	
衆	祐	世	尊	世	尊
扶薩	開亦云	菩	薩	菩	薩
各	仏亦独覓	辟支仏	亦縁	縁	覚
不	還	阿	那	阿	那
無	著果亦應眞	阿羅漢	亦言阿	阿	那
摩	世	長	者	長	者
光	梨子	觀	世	觀	世
舍	露亦秋	舍	利	舍	利
背	捨	解	脱	解	脱
覺	意	菩	提	菩	提
直	行	正	道	正	道
除	鐘・除鐘女	比	丘・比丘尼	比	丘

『仏像讃并序』をあげられる。支遁は『法護像讃』を作ったほど法護を崇敬していたと思われるが、『阿弥陀仏像讃』に

仏経記。西方有国。国名安養。……其仏号阿弥陀。晋言無量寿。国無王制斑駁之序。以仏為君。三乗為教。男女各化育於蓮華之中。無有胎孕之穢也。……別有經記。以錄其懿。云此晋邦。五末之世。有奉正戒。諷誦阿弥陀經。誓生彼国。不替誠心者。命終靈逝。化往之彼。見仏神悟。即得道矣。

とある文中、「経」とか「阿弥陀経」は『無量寿経』を指すのではないかとされ、法護以後廬山の慧遠（三三四—四一六年）の頃までに『無量寿経』の行なわれていた証拠とされる。しかし支遁の文は果して『無量寿経』によったものか甚だ疑わしい。望月信亨博士の説によれば、それは『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』に

阿弥陀如来正遍知。父名月上転輪聖王。其母名曰殊勝妙顔。子名月明。と極樂浄土に女人ありと説くのを支遁が引いたのであり、またその経に

永離胞胎穢欲之形。純処鮮妙宝蓮華中。自然化生。

とあるのは支遁の「男女各化育於蓮華之中。無有胎孕之穢。」と一致することから、支遁は『阿弥陀鼓音声陀羅尼経』の説を引いたのであると論じられた。しかしこの經典は梁代にすでに失訳とされ『法経録』に出るのが最初で『出三蔵記集』には何ら触れられていないから、支遁より先の訳経であるかどうかは疑問である。

野上博士はさらに四世紀中葉の郗超（三三六—三七七年）の『奉法要』に「愍傷衆生」「蠕動之類」「端心正意」「両舌惡口妄語綺語」など、『無量寿経』に出てくる語句が認められるから、これは『無量寿経』から引用したのではないかと推察されている。しかしこれも藤田博士は福永光司博士の論文に郗超の仏教思想は浄土教とは全く関係ないとの見方を採用して、これを否定されている。郗超が浄土教に関心を持っていなかったことが、すぐそのまま『無量寿

『經』の語句を引用しないということになるかどうか疑問もあるが、これだけの語句によって郝超の時代に『無量壽經』が存在したという積極的な資料とはならないであろう。

さらに、後藤義乗⁽⁷⁾氏の指摘する『注維摩詰經』卷二の一文がある。方便品には「大願成就」を注して⁽⁸⁾ 什曰。初発心之時其願未_レ大。或大而未_レ成。大而成者唯法忍菩薩也。如_二無量壽四十八願_一。是大願之類也。

とあって、羅什(四〇一年長安入—四一三年没)が『無量壽經』の四十八願を知っていた証拠とされる。これをもって四二一年訳とする仏陀跋陀羅・宝雲訳の説は成り立たず、竺法護の訳であると論ぜられるのである。しかしこの説に対しても藤田博士の次のとき反論⁽⁹⁾がある。

1 この書の成立に寄与した僧肇(三七四または三八四—四一四)と竺道生(三五五?—四三四)の二人のうちで、竺道生は四二一年以降十三年間近く活躍した人であるから、現行『無量壽經』を見ていたと考える根拠は十分ある。

2 竺道生の注が、その晩年に近い頃のものであるとすれば、現行の『注維摩詰經』の成立が四二一年以降であると見ることはいつそう強化される。

3 「什曰」とあるのは羅什の言葉そのままであったかどうか疑問である。『注維摩詰經』に引用される經文でさえも、現行の羅什訳『維摩詰經』と二十箇所ほども違っているから、羅什の注が言葉通り集録されたとは信じ難い。

4 大正藏經本『注維摩詰經』には玄始十年(四二二年)に訳了された曇無讖訳『大般涅槃經』の文が引用されているが、これなどは羅什や僧肇の没後に訳出された經典である。

以上の諸点より成立に問題のある『注維摩詰經』をもって『無量壽經』の流伝を推測することは根拠が薄弱であると退けられる。このように見てくると、四二一年の仏陀跋陀羅・宝雲訳より以前に『無量壽經』が存在したという確かな資料は皆無となる。それでは神瑞二年(四一五年)の跋文を有する神瑞写經はどう解釈すればよいのであろうか。

このことについても藤田博士の詳細な反論⁽⁷⁴⁾がある。

博士は、筆蹟、書風、形式などからこの跋は信用できないと結論づけられた。まず筆蹟については中田勇次郎教授の論文⁽⁷⁵⁾を引用して書風の上から見ると北魏末の永熙頃(五三二—五三四年)の書写であること。この写経は楷書風で毎行十七字詰で書いてあるが、このような標準的写経形式は五世紀半頃から六世紀にかけて成立したものと見られている⁽⁷⁶⁾こと。その他、類似の写経の題跋との比較検討によって神瑞二年なる跋は後世に書き加えられたものであろうと論じられた。筆者はこの方面の知識に乏しいのでさらにこの論に批判を加えることはできないが、書風や形式から専門家がこのような判断を下すのであるから、神瑞二年の跋は後世のものであると云わざるを得ない。

以上のことから竺法護説も採用することができない。

その他、康僧鎧初訳、竺法護修訳という説が春日井真也博士⁽⁷⁷⁾によって提唱されているがその根拠は明らかにされていない。

四、仏陀跋陀羅・宝雲共訳説

1 経録からの検討

この説の淵源は僧祐の『出三蔵記集』、卷二の「新集経論録」に出る仏駄跋陀の項に⁽⁷⁸⁾

新無量寿経二卷 永初二年於道場寺出

宝雲の項に⁽⁷⁹⁾

新無量寿経二卷 宋永初二年於道場寺出
一録云於三六合山寺出

とあって、経名も訳出年時も場所も宝雲訳の「一録に云う」というのを除けばすべて一致している。経題に「新」と

冠せられているのは前述のごとく、僧祐が竺法護訳（『無量清淨平等覺經』を『無量壽經』と名付けた）と區別するために勝手につけたもので、經典自身にはついていなかったものと考えられる。

このように經の題名も、翻訳の年代も場所も同じであることを見ると、兩經は別にあるのではなくて、仏陀跋陀羅と宝雲の共訳ではないかとの疑問が生ずる。僧祐の記述は、そのまま『法經錄』、『歷代三寶紀』、『大唐内典錄』、『古今訳經図紀』、『武周錄』、『開元錄』、『貞元錄』へと伝承されていくが、なぜか、『仁壽錄』と『靜泰錄』には兩訳ともに何ら記するところがない。また『武周錄』、『開元錄』、『貞元錄』では欠本とされている。これはおそらく、『無量壽經』が康僧鎰訳と信じられたがために、仏陀跋陀羅・宝雲訳に該当する經典がなくなり、やむを得ず欠本とせざるを得なくなったのではあるまいか。

仏陀跋陀羅と宝雲が共訳したのであろうとする説は古くから有力であり、境野黄洋⁽⁸³⁾、望月信亨⁽⁸⁴⁾、小野玄妙⁽⁸⁵⁾、常盤大定⁽⁸⁶⁾、塚本善隆⁽⁸⁷⁾、津田左右吉⁽⁸⁸⁾、大野法道⁽⁸⁹⁾、北川賢浄⁽⁹⁰⁾、結城令聞⁽⁹¹⁾、鈴木宗忠⁽⁹²⁾、藤田宏達⁽⁹³⁾、片山了仙⁽⁹⁴⁾の各氏は、こそってこの説を主張した。筆者もこの説が一番妥当であろうと考えている。そのことは僧伝を精査することによって明らかとなる。

2 僧伝からの検討

仏陀跋陀羅の伝として現存するまとまったものは、『出三藏記集』巻十四に収められる「仏大跋陀伝」⁽⁹⁵⁾が最も古く、ついで慧皎の『梁高僧伝』巻二の「仏駄跋陀羅伝」⁽⁹⁶⁾が続く。

この兩伝を読むと仏陀跋陀羅は北インドの出身であった。三歳にして父を失い、五歳で母をも亡くした。十七歳で出家して經を学んだが他人が一月を要するところを彼は一日でマスターするほど才能が秀でていた。とくに禅律をもつて名を馳せたという。やがて同学の僧伽達多と共に鬬質⁽⁹⁷⁾に遊学した。その時、たまたま当地へやって来た智嚴と出

会い、彼の勧めによって中国へ渡ることとなった。仏陀跋陀羅は當時有名な鳩摩羅什が長安に在ることを聞き、早速長安へ赴いて羅什と問答を交している。その時に通訳の任に当たったのが宝雲であった。秦の王、姚興は仏法に帰依し、三千余人の僧を宮中に招待して供養したが、仏陀跋陀羅は衆と行動を同くせず静を守った。彼は弟子に「我、昨日本国より五船の俱に発するを見た」と語ったのを弟子が他人に話したところ、関中の旧僧たちは「異を顕わして衆を惑わすものである」と彼を擯斥し長安を去らしめた。おそらく仏陀跋陀羅は禅や律に詳しくなかったというから実践面に重きを置くのに対し、羅什は般若系の学者でもあったから理論面を重視する傾向にあり、羅什一門との間に反りの合わぬところがあつたのであろう。彼は弟子慧観・宝雲ら四十余人と共に長安を後にして廬山の慧遠のもとに赴いた。そこで慧遠の請に応じて『達摩多羅禅經』二巻を訳した。その後、建業の道場寺で訳經に従事することとなる。主な訳經は『出三藏記集』卷二所収の「仏大跋陀伝」によると、『華嚴經』（六十巻）『六卷泥洹經』『新無量寿經』『大方等如来藏經』『菩薩十住經』『本業經』『出生無量門持經』『淨六波羅蜜經』『新微密持經』『禅經』『觀仏三昧經』などである、という。この中、『六卷泥洹經』は法顯との共訳であるが実際の翻訳に当たったのは宝雲⁽⁹⁸⁾であつた。また宝雲は『雜阿毘曇心論』の翻訳に當つて僧伽跋摩と協力して伝訳し、⁽⁹⁹⁾『広博嚴淨經』の場合は智嚴と共訳し、⁽¹⁰⁰⁾求那跋陀羅の訳經にも協力して『楞伽阿跋多羅宝經』や『勝鬘經』などを伝訳している。宝雲はこのような揚子江下流域、とくに建業の道場寺を中心としてインド渡來僧の訳經に協力した優秀な翻訳家であつた。宝雲と仏陀跋陀羅とは長安以来、常に親密な關係にあつたから、『無量寿經』翻訳の場合も、おそらく仏陀跋陀羅に協力して宝雲が漢語に訳したものと思われる。彼の伝記を読むとインドの語学に通じていたことが、よく理解できるのである。『出三藏記集』卷十五⁽¹⁰¹⁾および『高僧伝』卷三⁽¹⁰²⁾に収められた宝雲の伝記を粗述すれば次のごとくである。

宝雲は涼州の人である。若くして出家し、晋の隆安の初(元年は三九七年)法顯、智嚴らと相前後して西域に旅立つ。

于闐を経てインドに入り仏跡を巡拝した。一方彼は梵書を学び、インド諸国の音字詁訓に通ずるようになった。無事長安に帰り、そこで仏陀跋陀羅に随つて坐禪を修し、經典を学んだ。間もなく仏陀跋陀羅が秦僧のために擯斥されたので師と共に廬山に赴き、後、道場寺において『新無量寿經』その他の諸經を翻訳した。常に手に胡本を執り、口に晉語を宣べ、漢語とインドの言語に兼ね通じ、音訓はまことに正しく、宝雲が定めた訳語は大衆ごとく信服した。はじめ長安の竺仏念は宣訳をよくし、符・姚の二世に亘つて多くの經を訳し、安世高、支謙より以後に竺仏念を越えるものはいないとまで云われたが、江南の地においては宝雲を越えるものはいない。晋・宋の時代に法藏をよく弘通し、沙門慧觀などはみな友であった。宝雲は元来、幽居を好み六合山寺に住して『仏所行讚』を訳出した。道場寺の慧觀は臨終の時に宝雲に都の建業へ還つて道場寺を総理することを請うたので止むなく都へ還つたが、一年余りで再び六合山に還り、元嘉二十六年（四四九年）七十四歳で歿した。

師の仏陀跋陀羅は元嘉六年（四二九年）七十一歳で歿したと伝えられるから、宝雲は約二十歳年下であつたことになる。¹⁰⁴

右によつて知られる宝雲の経歴からして、漢語は勿論、インドの現地で学習した語学力は、伝語者としては最適であり、多くのインド渡來僧を助けて訳經に従事したことが肯ける。そして長安から道場寺に至るまで師と仰ぐ仏陀跋陀羅と行動を共にしており、『新無量寿經』の翻訳に際しても師を助け、実際に漢文に翻訳したのは宝雲であつたとするば道理が合うこととなる。このコンビは前述の『六卷泥洹經』の例にもあることである。また『出三藏記集』卷二や『法經錄』卷¹⁰⁵に記す「六合山寺において出す」という説は、宝雲が六合山寺に住していたから誤伝したか、あるいは、仏陀跋陀羅と別れて六合山寺に隱栖していたときに改訂を加えたものか、いずれかであろうが、この点は明らかにすることができない。

3 訳語からの検討

次に訳語・訳風について検討せねばならない。『無量寿経』の訳語が、新訳語であることは前に述べた。それでは仏陀跋陀羅・宝雲共訳として妥当な訳であろうか。この点については北川賢浄氏が仏陀跋陀羅、宝雲共訳の『六卷泥洹経』¹⁰⁷⁾ 仏陀跋陀羅訳の『六十卷華嚴経』、宝雲訳の『仏本行経』の訳語と対照して両者一致もしくは酷似していることを証明された。そして『無量寿経』にある「得仏華嚴三昧」とが「又皆遵普賢大士之徳」「現前修習普賢之徳」というのは、明らかに仏陀跋陀羅訳の『華嚴大経』を予想している¹⁰⁸⁾と述べている。いま北川氏の対照表を基にして『無量寿経』に出る用例を他の三経と比較し若干の改訂と増補を加えた表を作成したのが次の表である。

○印は無量寿経の用語と同じ			
無量寿経	六卷泥洹経	六十華嚴経	仏本行経
王舎城	○		○
尊者	○	○	
羅云			
菩薩	○	○	○
普賢菩薩		○	
安住一切功德之法		安住功德海 安住功德藏	
究竟彼岸	○	到於彼岸	度至彼岸
兜率天		○	兜術天
從右脇生		○	從右脇出

現行七步			
光明顯曜普照十方無量仏土	放光明遍照三千大千世界	普放大光明	故行七步
光明普照無量仏土	普照十方諸仏世	諸仏光明照曜十方	
六種震動	○	○	六反震動
為無上尊	○		
釈梵護世諸天	釈梵護世魔王諸天	釈梵	釈梵
翼從			
往詣道場		○	○
吉祥		○	○
奮大光明			○

吹法螺	對法雨	塵勞	洗濯垢污	入國分衛	福田	成等正覺	滅度	植衆德本	愍傷衆生	愍念衆生	壞裂魔網	無願三昧	華嚴三昧	如來甚深法藏	世尊	偏袒右肩	世雄	群萌	饒益	遏絕	錠光如來	恆沙
									愍傷一切衆生	愍念安樂諸衆生												
	雨法雨		洗濯塵垢								壞裂煩惱網											
									愍傷衆生		壞裂牢網	壞裂衆網	壞裂堅網								錠光 定光 仙	
泥洹	地獄・餓鬼・畜生	定衆	信衆	五逆誹謗正法	以弘誓功德	被弘誓鎧	那羅延身	猶如明鏡	其香普薰十方世界	身心柔軟	身意柔軟	厭惡女身	志求無上道	閉塞諸惡道	惠利群生	空・無相・無願	長者	金剛鐵围山	餓天	色究竟天	疑惑	下南西北方四維上
				五逆罪誹謗正法					其香普薰三千大千世界					永閉諸惡趣								
	地獄・畜生・餓鬼(傷)				被弘誓德鎧		猶如明淨鏡		其香普薰一切世界	身心柔軟				閉塞諸惡趣	惠利一切							
	地獄・鬼・畜生											厭惡女人形		閉塞邪趣門				鐵围金剛山	焰天			四維上下

『阿弥陀経』や『平等覚経』の文体に似ているところがある。また内容も中国の神仙思想や老荘、あるいは儒教道徳を思わせる教説がある。このことから望月信亨博士は「五惡段の五善・五戒・福德・度世・長寿の思想は劉宋智嚴が宝雲と共に訳した『四天王経』の説に頗る類似しているから『寿経』の説が『四天王経』と同じく道教の増寿益算思想の影響を受けたものとすれば、五惡段は宝雲の『無量寿経』にはじめて記述され、やがて『大阿弥陀経』『平等覚経』の二経にもそれが追補されたものとすべきである。」と新しい經典の經文が古い經典へ追補されたという説を出された。『四天王経』の思想内容との関係、またその翻訳に宝雲がタッチしていたところから成程、そういう可能性もあり得ることであるが、しかし筆者はそうではないと考える。その理由は『無量寿経』が竺法護訳であるならば云えることであるが、もし仏陀跋陀羅・宝雲訳であるとするならば、「蠕動之類」とか「一心」の訳語は宝雲の時代にはあり得ないことであるから、やはり『無量寿経』の五惡段は『大阿弥陀経』や『平等覚経』を受けて増補されたものと考ええる。

むすび

以上の考察から『無量寿経』の翻訳は仏陀跋陀羅・宝雲の師弟によってなったものであり、実際に漢文に翻訳したのは宝雲であるとの結論に達した。この見解が事実とすれば、永初二年（四二二年）建業の道場寺において訳されたことになる。藤田博士は羅什が『阿弥陀経』を訳した際（四〇二年）に『無量寿経』が予想されていたと見ることは困難であるから『無量寿経』の翻訳はそれ以後であり、謝靈運（三八五—四三三年）の作になる『無量寿頌』に

法藏長王宮⁽¹²⁾ 懷道出国城 願言四十八 弘誓極群生 淨土一何妙 來者皆清英 頽年欲安寄 乘化必晨征

とあるのは明らかに四十八願を説く『無量寿経』を知っているからその訳時は謝靈運が処刑された元嘉十年(四三三年)以前のことであるとする。したがって永初二年(四二一年)の説は妥当であると論じておられる。同博士はさらに『観無量寿経』の翻訳とも関連づけて四二四年以前にまで最下年限をせよめようと試みられるが、同経は成立の問題、訳者と伝える量良耶舎の問題と複雑な諸問題がからむから、稿を改めて論ずべきであると思う。

註

(1) 『開元録』一、大正蔵五五、四八六c

(2) 『歷代三寶紀』五、大正蔵四九、五六b

(3) この書は智顗の真撰ではないというのが通説である。

佐藤哲英『天台大師の研究』五六七—六〇一頁

阿川貫達『観無量寿経疏解題』『浄土宗全書』第二十一卷、二〇四頁。

(4) 大正蔵三七、一八八c

(5) 同 三七、一三一c

(6) 同 四九、五六b

(7) 同 四九、七四a

(8) 大正蔵五〇、三六三a

釈道祖。吳国人也。少出家為天台寺支法斎弟子。幼有才思。精勤務學。後与同志僧僊道流等共入廬山。七年並山中受戒。各隨所習日有其新。遠公每謂祖等易悟。尽如此輩不復憂後生矣。遷流等並年二十八而卒。遠歎曰。此子並才義英茂。清悟日新。懷此長往。何痛哉。道流撰諸經目未就。祖為成之。今行於世。……以晉元熙元年卒。春秋七十三矣。(高麗版は七十二)

(9) 大正蔵四九、一二七c

(10) 同 四九、四五a 勅沙門宝唱撰衆經目錄四卷。

- (11) 同 五〇、四二六 b—c
 釈宝唱。姓岑氏。吳郡人。即有吳建国之旧壤也。……年十八。投僧祐律師而出家焉。……〔天監〕十四年。勅安樂寺僧紹。撰華林仏殿經目。雖復勒成未快帝旨。又勅唱重撰。乃因紹前錄。注述合離甚有科掇。一帙四卷。雅快時望。遂勅掌華林園宝雲經藏。搜求遺逸。皆令具足。備造三卷。以用供上。
- (12) 同 四九、一二六 b
- (13) 同 四九、四九 c—五〇 a
 後漢四十二章經一卷……宝唱又云。是竺法蘭譚。此或掇其与撰摩騰同時来耳。
- (14) 同 五五、七 b
- (15) 同 四九、五〇 a
- (16) 同 五五、一六 c 「新集安公失訳経録」
- (17) 同 四九、五〇 c
- (18) 同 五五、二六 c 「新集統撰失訳経録」
- (19) 同 四九、五八 b
- (20) 同 五五、三〇 b
- (21) 同 四九、六五 a
- (22) 境野黄洋『支那仏教精史』二四一—二四三頁
- (23) 大正蔵五〇、三二五 a
- (24) 同 四九、五六 b
- (25) 大野法道『大乘戒経の研究』二二三頁 平川彰『初期大乘仏教の研究』四八八—四八九頁
- (26) 加藤智学「無量寿の訳者を論ず」『無尽燈』第十二卷、三・四号
- (27) 椎尾弁匡『仏書解説大辞典』四二七頁。
- (28) 大正蔵五五、七 c
- (29) 同 五五、一一九 b

- (30) 同 四九、六二b
- (31) 同 五五、一五八c
- (32) 同 五五、一九一b
- (33) 同 五五、二三三b
- (34) 同 五五、三三三b
- (35) 同 五五、三八九b
- (36) 同 五五、四九五b
- (37) 同 五五、四四八c
- (38) 同 五五、六二六c
- (39) 荻原雲来『荻原雲来文集』二三〇頁
- (40) 泉芳璟『梵文無量壽經の研究』九〇—九一頁
- (41) 野上俊靜『無量壽經漢訳攷』『日本仏教学会年報』第十五号（昭和二十四年度）一八〇—一九四頁
『大谷大學所藏敦煌古写經』一五七—一六三頁
- (42) 滋野井恬「無量壽經漢訳者論議に寄せて」『大谷學報』第四十五卷 第三号、三一—四三頁
- (43) 後藤義乗「数理文献学的方法による無量壽經類漢訳者の推定」『印度學仏教学研究』第二十六卷 第二号、一七四—一七五頁
- (44) 稻城運恵『浄土三部經訳經史の研究』四二〇—四二二頁
- (45) 大野法道『大乘戒經の研究』一七四—一七五頁
- (46) 『高僧伝』卷一、（大正蔵五〇、三三六c—三三七a）によると次のごとく伝える。竺曇摩羅刹。此云「法護」。其先月支人。本姓支氏。世居燉煌郡。年八歲出家。事外国沙門竺高座為師。誦經日万言。過目則能。天性純懿操行精苦。篤志好學。万里壽師。是以博覽六經。遊心七籍。……隨師至西域。遊歷諸國。外国異言三十六種。書亦如之。護皆遍學。貫綜詁訓音義字體。無不備識。遂大齋梵經。還歸中夏。自燉煌至長安。沿路伝訳寫為晉文。……時有清信士聶承遠。明解有才。篤志務法。護公出經多參正文句。超日明經初訳。頗多煩重。承遠刪正得今行二卷。其所詳定類皆如。

此。承遠有「子道真」。亦善「梵字」。此君父子比辭雅便。無累於古。又有「法首陳士倫孫伯虎虞世雅等」。皆共承「護旨」執筆詳校。

右の文によると六經、七籍を學んだと云うから漢文に精通していたことは勿論、西域諸國を遊歴して外國の異言三十六種を學んだと云うから梵語にも通じていたのであらう。従つて彼の場合は『普曜經記』（出三、七）『出賢劫經記』（出三、七）『阿惟越致遮經記』（出三、七）『魔逆經記』（出三、七）『正法華經記』（出三、八）などの經記を見ても殆んど「手に胡本を執り口に秦言を宣ぶ」とある。それでも承遠、尋道真父子のような語學に勝れた協力者があつた。

それに対して『首楞嚴後記』（出三、七）によれば「于時レ有月支優婆塞レ文施寄。手執二胡本一。……時訳者歸慈王世子帛延善レ音胡音。」とあり。釈慧観の『勝鬘經序』（出三、九）によれば「請外國沙門求那跋陀羅。手執二正本一口宣二梵音一。……釈宝雲訳為宋語。德行諸僧慧嚴等二百余人。考レ音詳義以定二厥文一。」とあつて、分業化されている。

- (47) 塚本善隆『中国仏教通史』第一卷、二二—二二五頁 字井伯寿『釈道安研究』竺法護翻譯歴、一八八—一九一頁。岡部和雄『竺法護伝』再構成の試み—竺法護訳經研究の基礎のために—『仏教史學』第十二卷、第二号 三—七頁

- (48) 大正藏三、九四 c

- (49) 同 三、四八三 b

- (50) 同 三、五〇二 c

- (51) 同 三、五二一 b

- (52) 同 三、五二八 a

- (53) 同 九、二二三 c

- (54) 同 一二、八八 a

- (55) 同 一二、一五四 c

- (56) 滋野井恬前掲論文三三頁

- (57) 同 一二、二八〇 a

- (58) 同 一二、二八〇 c

- (59) 同 一二、二八〇 c、二八一 a

- (60) 同 五五、五a—b
- (61) 野上俊静前掲論文
- (62) 『高僧伝』卷一、大正蔵五〇、三二六c
- (63) 『弘明集』卷一五、大正蔵五二、一九六b—c
- (64) 望月信亨『浄土教の研究』四二—四二三頁 藤田宏達 前掲書 七七頁
- (65) 大正蔵一二、三五二b
- (66) 同
- (67) 『開元録』卷六 大正蔵五五、五三九a—b
- (68) 『法経録』卷一 大正蔵五五、一二一c
- (69) 『弘明集』卷一三 大正蔵五二、八六a—八九b
- (70) 福永光司「都超の仏教思想—東晋仏教の一性格—」『塚本博士
頌壽記念 仏教史学論集』所収、昭和三十六年、六三一—六四六頁
- (71) 後藤義乗、前掲論文一七五頁
- (72) 大正蔵三八、三三九a
- (73) 藤田宏達『無量寿経』の訳者問題補説勝又俊教博士
古稀記念論集『大乘仏教から密教へ』昭和五十六年、六九六—六九七頁
- (74) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』七七—九六頁
- (75) 中田勇次郎「南北朝の写経」『京都市立美術大学研究紀要』第五号、昭和三十二年、八頁
- (76) 藤枝晃「北朝写経の字すがた」『墨美』第一一九号、昭和三十二年、四頁 小川貫弍「西域出土の六朝写経」『西域文化研究』第一、四四頁
- (77) 春日井真也「原始無量寿経思想形態推定への課題」『仏教文化研究』第二号、昭和二十七年、四六頁 春日井真也・藤堂恭俊『浄土經典の形成』宮本正尊編『仏教の根本真理』五二三頁
- (78) 大正蔵五五、一一c〔於〕—㊦、場+(寺)㊦
- (79) 同 五五、一二a
- (80) 『武周録』卷一二「大小乘闕本経目」大正蔵五五、四四二b、四四八c

- (81) 『開元録』卷三、卷五 大正蔵五五、五〇五c、五二五b
- (82) 『貞元録』卷五、卷七 大正蔵五五、八〇二c、八二二b
- (83) 境野黄洋『支那仏教精史』二四三頁
- (84) 望月信亨『仏教經典成立史論』二二〇頁
- (85) 小野玄妙『仏書解説大辞典』第十二卷、一〇〇頁
- (86) 常盤大定『後漢より宋齊に至る訳経総録』七七〇—七七一、九四四—九四五頁
- (87) 塚本善隆『支那仏教史研究』六三六頁、『塚本善隆著作集』第四卷『中国浄土教史研究』二七頁
- (88) 津田左右吉『シナ仏教の研究』六二頁
- (89) 大野法道『大乘戒経の研究』一七二頁
- (90) 北川賢浄『康僧鑑訳と称せらるる現行無量寿経の訳者に就て』『専修学報』第一号、二四一—二七七頁
- (91) 結城令聞・石上玄一郎『他力本願大無量寿経入門』一九三一—一九六頁
- (92) 鈴木宗忠『基本大乘浄土仏教』七八頁
- (93) 藤田宏達 前掲書 六九—七七頁
- (94) 片山了仙『無量寿経成立攷』二七—二九頁
- (95) 大正蔵五五、一〇三b—一〇四a
- (96) 同 五〇、三三四b—三三五c
- (97) この時代に云う願實はカシュミールのことであろう。
- (98) 『六卷泥洹記』『出三蔵記集』卷八、大正蔵五五、六〇b
- 摩竭提国巴連弗邑。阿育王塔。天王精舍。優婆塞伽羅。先見晋土道人积法願遠遊此土。為求法一故。深感其人。即為寫此大般泥洹經如來秘藏。願令此經流布晋土。一切衆生悉成平等法身。義熙十三年十月一日。於謝司空石所立道寺。出此方等大般泥洹經。至三十四年正月二日。校定尽訖。禪師仏大跋陀。手執胡本。宝雲伝訳。于時坐有二百五十人。
- 『歷代三寶紀』卷七、大正蔵四九、七一b
- 『開元録』卷三、大正蔵五五、五〇七b

(99) 『出三藏記集』卷二 大正藏五五、一二b

(100) 同 卷二 大正藏五五、一二c

(101) 同 卷二 大正藏五五、一二c—一三a

同 卷九 大正藏五五、六七b

釈慧観作「勝鬘經序」

請外国沙門求那跋陀羅。手執正本二口宣梵音。……釈宝雲訳為宋語。德行諸僧慧嚴等一百余人。考音詳義以定厥文。大宋元嘉十三年歲次玄枵八月十四日。初転梵輪。訖于月終。

『出三藏記集』卷一四、大正藏五五、一〇五c

求那跋陀羅伝

於丹陽郡訳出勝鬘・楞伽經。徒衆七百余人。宝雲伝訳。慧観執筆。

(102) 大正藏五五、一一三a—c

(103) 同 五〇、三三九c—三四〇a

(104) 『出三藏記集』卷一四、大正藏五五、一〇四a

『高僧伝』卷二、大正藏五〇、三三五c

(105) 大正藏五五、一二a

(106) 同 五五、一一九b

(107) 北川賢浄、前掲論文 二六九—二七六頁

(108) 望月信亨、前掲書 二二二—二二三頁

(109) 「蠕動」の語は竺法護訳としては『賢劫経』卷一(大正藏一四、六a)、『正法華経』卷一(大正藏九、六九a)などであり、それ以前では支婁迦讖訳『道行般若経』卷七、卷一〇(大正藏八、四六二b、四七五b)、『阿闍世王经』卷上(大正藏一一、七五二a)などにある。

(110) 大正藏一一、七六一b—c

(111) 同 一四、八一〇c

- (112) 同 三、四七二c
 - (113) 同 三、四八三a、五二三a
 - (114) 同 三、九四c、一〇〇c
 - (115) 同 一四、九二四c
 - (116) 同 八、一四九a
 - (117) 同 八、二c
 - (118) 同 九、四二九a、四六一a
 - (119) 望月信亨 前掲書 二三三頁
 - (120) 『広弘明集』卷一五、大正蔵五二、二〇〇a
- 塚本善隆博士も『支那仏教史研究』(六三六—六三七頁)において謝靈運の文を手がかりとして『無量寿経』訳出年代の最下限とされている。